

## 遠く、深く見つめて

保 坂 一 夫

『リュンコイス』が50号を迎えた。会員の1人としてこの上ない名誉である。

本誌創刊は1960年。偶然、私の大学入学の年である。出会いは1968年。前年春に新潟大学に助手として赴任した私は、仕事に慣れるも慣れないも言えないうちに、先輩の先生からドイツ語の助手になったら独文学会に入るものですよと言われ、ドイツ語教室の手で会員登録を済ませてもらった。翌年春、こわごわ学会なるものへ出かけた若者の眼に映ったのは受付横のテーブルに山積みされ白く輝く雑誌であった。何もかもが初めてで、手にとっていいものか分からず迷いながら見つめていると、そこにいた方が「どうぞ」と言って1冊渡して下さった。それは『リュンコイス』8号であった。私はドイツ文学との実践的な関わり方を手渡された思いで高揚感とともに雑誌を持ち帰った。目次を開くと、執筆者の中に、前年赴任した翌日に新潟駅でお見送りした石井靖夫先生の名前があった。偶然の重なりに背筋に戦慄が走った。『リュンコイス』8号はいまも我が家の書架に立っている。ゲーテの描いたアツピア街道沿いのCasale Rotondoの表紙は昔のままである。

その後、切れずに続いていた偶然の糸に導かれて本誌会員になった。以来15年、この度、記念号の発刊を前に創刊号を繙いてみると、「創刊の辞」で初代会長の奥津彦重先生が本誌名にギリシア神話の「山猫のごとき鋭い眼を持つ者」リュンコイスを選んだ理由を説明して、アルゴ船の舵手というより、ゲーテの『ファウスト』第2部の塔守にあやかりたいからであると書いておられる。リュンコイスは「見るために生まれ、見る役に付けられ、…彼方をながめ、近きを見やり、…すべてに永遠の華を見てきたが、…わが眼の見たものは、いかなるものであれ、まことに美しかった！」

と歌った。先生は、本誌にも、そう言いうる日の到来を一意祈念なさったわけである。

しかし、リュンコイスの眼に映じたのは美しい世界だけではなかった。海を干拓し広い土地を所有したファウストは、完全な所有地を持ちたいという欲望からそこに住む老夫婦に立ち退きを求めるが、その願望を知ったメフィストは、菩提樹に守られた小屋と礼拝堂ともども老夫婦を焼き殺してしまう。リュンコイスはその悲劇をも見なければならなかった。彼は嘆いている。「わが眼はこれを見届けねばならないのか！わたしはこんなにも遠くまで眼をきかせねばならないのか！」

リュンコイスの名を冠する本誌の会員として、私は、いま、現実世界と文学世界を、遠く、そして深く見つめ、美しくて醜いその現実から眼を逸らすことなくそこに出現するものについて考察し、しかもなお「わが眼の見たものは、いかなるものであれ、まことに美しかった」と言える日が到来することを祈念しつづけたいと念願している。

## 教育のマス・プロ化に抗して

柳 川 三 郎

二十七歳の私が、本学三島教養部に専任講師として着任したのは、昭和三十年四月のことであった。私は生まれも育ちも、神奈川県西部の丹澤山麓の秦野であるが、そこは三島への通勤圏にあり、大学としては歓迎すべき勤務条件を具えたものとして、見てくれたに違いない。当時は丹那トンネルを越えて、さらに西へ行くのは、いかにも都落ちという感が強く、三島教養部の先生方は東京回帰の気持ちの強い人が多かった。大学当局はその対応に苦慮しておられた筈である。

その頃、大学当局は経営を重視し、必要以上に多数の学生を入学させていた。教員の負担も過重となった。私の場合、一クラス九十名授業を、週に十二回担当した。語学教育の質を落とすたくない私は、いろいろと授業に工夫を凝らした。

何よりも大事なものは学生の掌握である。そのために座席を出席簿順に固定化させた。遅刻者は入室させなかった。そして前の時間に学習したことについて毎時間小テストをした。授業をやりながら五点満点で採点し、エンマ帳に転記し返却した。ためると整理が大変なので、ためないように心掛けた。成果は上がったようである。東京の親学部ドイツ語担当者から「三島から来た者はドイツ語がよくできる」と誉められたこともあった。

上級学年になって読み物を対象とした授業でも、私はできるだけ学生の理解力に沿った授業を展開するよう心がけた。学生はその事を評価し、授業が分り易いと言ってくれた。

なお昭和三十年四月から昭和四十一年三月まで、盛岡の私立岩手医科大学の二年間の教養課程の学生教育を、委託されたことに付言しておきたい。彼らはよく勉強をした。そしてそれぞれの下宿を通じて地域の人々に馴染んでいた。学内の日本大学各学部の学生、短期大学部の各学科の学生と交

流を持ったのは自然のなりゆきである。その成果は、大学祭のドイツ語劇となって実を結んだ。順は覚えていないが、シラーの『ウィルヘルム・テル』、クライストの『こわれ甕』、レッシングの『エミーリヤ・ガロッティ』などである。配役のほとんどを医進課程の諸君が引き受けた。舞台の袖には科白の訳を書いたものを提示した。問題は舞台の設営である。これには独研の法・文・経・商のメンバーが当たった。何とか図書館の三階に舞台を作り上げた。

折角の学生諸君の努力にもかかわらず、客の入りはよくなかった。出演者の世話になっている下宿の家族の方たちが中心であった。

その後、国際関係学部発足後を含めても、三島でドイツ語劇は行われていない。今思えば師弟一体となって一つのことに取り組むことのできた良い時代であった。

## 黙示の思い

落合直文

一九五九年、奥津彦重先生中心に創刊された『リュンコイス』は、半世紀の五十号を迎えるとか、恭賀の至りですが、諸々の事情で未発刊の年も有りますので何とも言えません！

奥津先生は先の戦争で、ドイツとの通事の仕事で国を支えていたという関係で、昭和二五年にGHQ（駐留軍）より、レッド・パージを受け、東北大学での公職を追われてしまいました。先生は東大の独文出身ですが、余りに語学に博識の言語学者であり、当時日本での最も秀でた一人だったに違いありません。ちなみに文学方面の「いわゆる当時の国益・有害図書」（ドイツでの焚書に相当）の責任者には、同じ東大の独文出で元C大教授だったT先生が任命されてしまい、いわゆる東大独文が国策に関わってしまったと推察されます。

これらは本人の意思とは無関係で当時の社会状況や国の政策であり、日本の最高峰に位置した先生には「仕方なし」の気もしますが、終生大分気にしておられ、出版物には何事も慎重でした。

私の手許にある『リュンコイス』は、三号（一九六二年）からでドイツ文学の論文とは関係ない創作詩も掲載されており、今の学術誌となった『リュンコイス』から程遠く、同人誌同様に、定価も百三十円と記されており、市販もされていたと思われます。

奥津先生が辞書づくり等、日本有数の語学者なら、その周囲はそれらの関係者が勢揃いで日大に集結していました。私が築き上げられた基礎は、法政大の消えてしまった独文科でしたが、そこでの先生方に羨やまれ、また先生の周囲には伊勢の皇學館大学の学長になった教授もおられました。

しかし、これらの事情は三十余年会員だった独文学会の『ドイツ文学』

で一切読んだことがなく、諸々の事情で「黙示されて来た」と推察します。

現在のリュンコイスが盛況になったのは、商学部の豊田順一教授が、文理の助手時代から中心になり、桜門ドイツ文学会を学術団体に格上げする努力を重ね、その機関紙を「学術誌」に成長させてくれたお陰です。当時ドイツ語関係の学術誌は、独文学会の「ドイツ文学」、ゲーテ協会の「ゲーテ年鑑」位しかなく、論文掲載は至難の技であり、私も応募しましたが不採用でありました。また当時学術論文が大学教員の採用昇格の条件と思われ、学術誌不足でした。

私も、いわゆる編集長を三、四度やりましたが、その折集まった論文は私を含めて他一編だった時があり、休刊になることが何回かあって、その都度頭を悩ませました。

多分当時は文理学部の独文研究室の『ドイツ文学論集』が発刊前後の話で、本来リュンコイスが「その役割を担ってた」と思われますが、低調になり、その上、桜門ドイツ文学会が「文理の独文と別組織」となっていました。

しかしそこでの問題は、学術誌・リュンコイスの財政と思われませんが、会員の会費だけ等ではなんとも仕方ありません。

私をも含めて寄贈先を減らすとか、諸々の工夫が必要と思われました。

## 言葉に出会って

小松崎 瑞彦

「全体主義」。奔流の中で、中学に入ると「自由」とか「人権」が舞い降りてきた。大学では「唯物史観」が未来を独占する風潮だったが、「…学概論」などの授業と同様、生きた言葉だとは思えなかった。

テキスト版を読む授業を選択した。初級文法、洋画、岩波文庫少々では歯が立たない。奥津先生は「まあ、触れて見るのもね。」という自然体で、編者注釈を次々に訂正されながら暗い森に道筋を拓いて行かれた。私は呆然とその跡を辿り、テキストを真黒にして、これが大学の講義なのかと思った。

日大独文学会の草創期、大山脈の威容を遙かに仰ぎ見て、私は端っこに茫然としていた。「リュンコイス」誌の「読者余滴」（奥津先生）、「西東詩集」（菊池先生）、「ゲーテ自然の中を行く」（神保先生）などなど。また斎藤秀先生が何気なく使われている「ミネルバの梟は・・・」のような形容語。辿り着けないと分っていたが文章語の美しさに心を奪われた。この先生方が身につけられた西洋古典と、更に「自由」や「自立」を奥深く感じさせる流されない在り方に強くひかれた。

会食の席は楽しかった。「神保君は夜しか来なくてね」（奥津先生）。「ドイツでアーベーツューのアーを直されるとは思わなかった、アハハ」（菊池先生）。「グラッペは破滅型ですよ」（私）、「ホー、（坂口）安吾が好きかね、えらい！」（植村先生）。「自由」「自立」そして「自在」。世に言う「大正教養主義」とはこれだと実感できた。明治以降の潮流の中の奇蹟的な異空間だったろう。

大量（生産、進学）時代、私自身もその一員に過ぎず、頭より喉でがんばっていたが、量が運動エネルギーを生み、叫びとスローガンの中でこの貴重な教養世界は、それを体現された先生方と共に消えて行った。ただ日

大に限って言えば、「人として生きたい」「バリケードの中で初めて孤独を知った」などの胸さわぎのする声もあった。

「(古代ギリシャ人の) 運命」「イデオロギー」「時勢」など、個を囲み取り込む力を「環境」の一語にまとめてしまえば、あの学生諸君は「環境」と格闘して自分達を救わんとしていたのだろう。大多数はその後教室に戻って、勉学や運動競技に目覚ましい力量を見せた。

勿論、あの先生の全ては「環境」の桎梏を圧倒して獲得されたものに違いない。私は「言葉に出会った」だけだったが、めぐり合わせに感謝している。



## 『リュンコイス』第10号から第15号頃の思い出すこと

豊田 順一

私が日本大学文理学部独文研究室の助手になったのが昭和47年（1972年）の4月だった。当時はまだ学生運動が完全に落ち着いた状況ではなく、大学内は物々しい警備員の警戒が続いていた状態であり、かつて独文学科の学科代表であった菊池栄一教授が文理学部長になっていた時であった。学科代表は石井靖夫教授であった。研究室の先生方も大学院生もそんなに多くはなく、割合と勉学に研究にと打ち込める雰囲気研究室の部屋全体にみなぎっていた。同時にそこに入出入りする人々はかなり以前からの友人同士の親しさをお互いにもっていたし、どの先生方とも気楽に話すことが出来ていた。

今から40年から50年程まえの60年代最初の安保闘争の政治の時代から、64年の東京オリンピックを迎え、経済の時代に入っていった。学園紛争があったといえ、そこでは消費と浪費に支えられた欲望の時代になっていた。ジャーナリズムや出版界、さらに学問の世界にも少なからず、このような時代背景は反映されていたことは、多くの人達が論じているところであるが、私たちの研究のやり方も徐々にではあるが変わってきた。かつてはタイプライターを使っていたのに対しワープロが出始め、コピー機も一般化し、ビデオも簡単に手に入るようになった。何より以前に比べ、遥かに簡単にドイツに行けるようになったのが私たちにとってはすばらしいことであった。

そのような環境のなかでその年『リュンコイス』第13号が出たが、研究室の先生方にまじって大学院の3人の方々と共に私の論文も始めて掲載させてもらった。その時の論文の掲載の事情についてはほとんど記憶にないが、ただ石井先生を含め、多くの先生方からは若い人たちに将来、外の学会等に発表するためにも、積極的に執筆するように言われたことを思い

出す。今から思ってみると、『リュンコイス』もその時々事情によりかなり性格をさまざまに変化させてきたように思える。

奥津彦重先生が中心に独文学科が創設された後、『リュンコイス』は日本大学全体のドイツ語の教員の懇親を兼ねた学内の同人誌風の学会誌の趣が最初の頃にはあったように思える。創刊号から第6号にかけて芸術学部の神保光太郎先生の詩が掲載されたし、やはり創刊号から第3号には奥津先生のエッセイ「読書余録」が載せられていた。第6号は奥津先生の「古希記念号」になった後には、第8号「坂本健順先生追悼号」が出され、その後は第14号に菊池先生の「古希記念号」、第17号に「石井靖夫教授追悼号」が、また第22号に「奥津彦重先生追悼号」が出ただけで特別号はその後出されることはなかった。個人の先生の思い出の号は、いずれも文理学部の専任の先生の記念号であった。

今から考えてみると、創刊号から第9号、10号くらいまでとそれ以降、第15号、16号くらいまでと、さらにそれ以降は『リュンコイス』の性格は徐々にではあるが、変化の様相を見せていたように思われる。第9号が出たのが昭和43年(1968年)の日大紛争の年であった。その号の編集後記にもその時のことが触れられていて、「各学部においてバリケードが張り巡らされてばらばらになり、[中略]連絡も不行届きになり、[中略]独文科中心の雑誌になって」しまったことが述べられている。そのために第10号以降は独文学科の研究室が中心に『リュンコイス』は編集されるようになっていった。

私は文理学部で数年、助手をしてから昭和52年(1977年)に商学部に移ったが、その助手時代は『リュンコイス』の編集や雑務の仕事も行った。当時は東洋出版に印刷製本をお願いしていた。文理学部から補助金が出ていて、それを元手に『リュンコイス』は出版されていたが、当時の独文研究室の先生方は他学部のドイツ語の先生方にも積極的に原稿を書いてもらうようお願いしていた。また応募してきた原稿にも細かく目を通して、意見を述べていた。

その後、文理学部だけでなく、持ち回りで各学部において編集作業を行うように変わるようになったのが第20号(昭和57年)からだと思われる。その一方で、このあたりから極端に原稿が集まらなくなってきた、毎年『リュンコイス』が発刊出来なくなってきた年が何年か続くことになった。

創刊号から全体を数えてみると7、8年出なかった年があることになる。

出版社も東洋出版からヨシダ印刷、さらに第46号からは文成印刷に変わった。その後、学術研究発表会の実施や日本学術会議協力学術研究団体の登録をしたりして、会員の皆様方の大きな努力により徐々に原稿も集まるようになり、今日に至っている。近年では若い人たちの応募が増え、編集委員会での原稿の審査もさまざまな意見の応酬があつて、会員皆様方の熱意が雑誌に反映されているように思える。この雑誌が末永く続くことを切に願っている。

## 再出発した桜門ドイツ文学会

田 中 徳 一

私が桜門ドイツ文学会の会員になったのは、大学院に入学した昭和47年、今から44年も前のこと。ずいぶん長い年月が経ったものと思う。昭和52年、大学院を出ると同時に文理学部独文学科助手になった。当時、本学会の創立者・奥津彦重先生は日大を退職されたばかりで、確か日本独文学会から感謝状を受けられたように記憶している。学科代表教授には、大学院時代に私の指導教授であった藤村宏先生が就いておられた。その後、都立大から酒井良夫先生が来られ、藤村先生の後任になられた。この酒井先生の時代に、桜門ドイツ文学会と機関誌『リュンコイス』の性格が大きく変わり、今日に至っている。その頃学科にいた先生方はほとんど鬼籍に入られ、当時からの変遷について知る人が少なくなっているのも、たまたま現場に立ち会った者として、回想を綴らせていただきたい。

桜門ドイツ文学会は創立以来、歴代の独文学科主任教授（後に学科代表教授）が会長の職に就き、学会を統轄してきた。それと共に『リュンコイス』も創刊以来、学会の機関誌であると同時に、学科の紀要の役割を果たしてきた。しかし学科の紀要として学部から出版費が下りていたという事情に加え、学科の教員数が増えるにしたがい、会員が学会誌として投稿できる余裕がなくなって行った。このような状況下で、昭和55年、酒井先生が意を決し、学会から切り離す形で、学科紀要『ドイツ文学論集』を創刊された。この経緯は創刊号の編集後記に記されているが、そこには『リュンコイス』は「19号をもって廃刊」となっている。正確には学科紀要として「廃刊」であって、その後も会員の熱意によって今日まで継続発刊されてきたわけである。

以後、再出発した桜門ドイツ文学会は、学科の理解と協力の下に、これまで同様、独文研究室に事務局を置かせてもらって、学部単位でブロック

を作り、当番ブロックが交代で学会運営に当たることになった。そのため会長と理事長も毎年交代するという不安定な状態が続いた。ようやく学会活動が軌道に乗り出したのは、平成10年代になってからである。その年度は私の所属する国際関係学部と法学部が当番ブロックを組むことになり、前年度ブロック（商学部）で検討準備された、広報協力学術団体として指定を受けるための申請を、日本学術会議に対して行った。故木村行宏先生と相談して研究発表会を始めたのも、この年度だった。こうして平成12年に同学術団体の指定を受けることになる。

その後、日本学術会議が改組されたことに伴い、新体制への移行措置が取られることになった。すなわち、日本学術会議協力学術研究団体への新たな申請を行うことになったが、この時もたまたま国際関係学部が当番ブロックとして、日本学術会議へ申請手続を行うことになり、平成19年に指定を受けることができた。このように偶然にも学会変遷の節目節目に、事務的に立ち会う経験をさせていただいたわけである。桜門ドイツ文学会が再出発した後、学会としての体裁を整えて活動内容を充実させ、この度『リユンコイス』が記念すべき50号を迎えることができたのは、まことに目出度いことである。これもひとえに熱心な会員の努力の結果であり、いろいろご指導くださった元ドイツ文学科主任教授で現会長の保坂一夫先生と、長く編集長を務めてこられた商学部教授の豊田順一先生のご尽力によるところが大きいと感じている。会員の一人として深甚の謝意を表したい。

## 山形県立図書館の『リュンコイス』

渡 辺 徳 夫

山形大学に隣接する寺町の菩提所へ、私は春と秋の年に2度お参りに行くのだが、墓参を済ませたあと、10分少々歩いたところにある山形県立図書館に決まって足を運ぶ。図書館に入ってすぐ左側に、山形が世に送り出した偉人たちの写真パネル、略歴、業績を展示している「県人文庫」というコーナーがあって、歌人の斎藤茂吉、民法学の我妻栄のほか、ゲーテやニーチェの作品を日本に紹介した阿部次郎、高山樗牛、そして独文学者の新関良三、相良守峯らの写真や直筆原稿、代表的な著書を見ることができる。展示を見ながらふと、同県の出身で、英語学の渡部昇一氏が「私の郷里からは」「ドイツ哲学、ドイツ文学に関係のある方々が雲の如く輩出しておられる」と『ドイツ留学記』の最初の章に書いていたのを思い出す。

学生の頃、『リュンコイス』が雑誌用の書棚に配架されているのを何度か目にしていたけれども、「なぜみちのく山形に」とは思いながら全くと言っていいほど関心を示さなかった。ところが、おかしなことに自分が投稿するようになってから、図書館に立ち寄るたびに、2階のカウンターに行って全巻請求し、書庫から出してもらっている。

創刊号ではノイシュヴァンシュタイン城、2号ではホルンベルク城の写真が表紙を飾り、巻末にはドイツ語関係の出版社の広告欄が掲載され、奥付には「¥100」の印が押されてある。そして中身はゲーテの *Lynkeus der Türmer* が劈頭に据えられ、ドイツ本国の研究者からの寄稿論文が中ほどに置かれて、創設者奥津彦先生の読書余禄で締めくくられ、私たちが見慣れている『リュンコイス』とは体裁や内容がいささか異なっている。黄ばみかけた、古本の臭いが漂う初期の『リュンコイス』を手にすると、先人の方々の初心、熱意、苦勞、期待がこちらに迫ってくるような感覚にとらわれ、新鮮な感動さえ覚える。

特に印象深いのは、2号の編集後記で、創刊号に寄せられた、関係者からの熱い声が紹介されている。

- 内容豊富、日本独文学会のそれに比しても遜色なく、近年独文学の発達向上に対して今更に驚きおります。
- 諸兄の御高論、並びに御随想等の多彩な御編集になる一つ一つの御勞作有益に且つ興味深く拝読させて頂き仕合せに存じております。
- 御内容の豊富なことは勿論、ドイツの写真等その御外形の立派なことに驚いております。よくもこういう見事なものできたものと感心しています。
- たいへん感じの良い研究発表の機関をおはじめになりご同慶の至りに存じます。早速読ませていただいて啓発されて居ります。同僚もすんだら見せてくれと申して居りますので喜んで廻すつもりです。

東京の独文研究室でも目にしたことのない『リェンコイス』創刊号をまさか山形で手に取ることができるとは、思ってもみなかったが、どうも桜門ドイツ文学会と山形との間には浅からぬ縁があるように思えるのである。

創設者の奥津彦重先生は、大学をご卒業後、新進気鋭の学徒として山形大学の前身、新設の旧制山形高校に赴任された。先生の研究、教育生活の出発点は山形の地であった。また、菊池栄一先生と神保光太郎先生は、大正時代末期の山高時代に若き日の奥津先生に教えを受けておられ、その後東大、京大で独文を専攻され、そしてゲルマニストになられる。山形時代から40年の時を経て、3人の先生方は、桜門ドイツ文学会の創設に当たられ、会長、副会長を務め、ともにその礎を築かれることになるのである。

実は、私自身ご定年前の、齢80間近の、奥津、菊池、神保の3先生方よりほぼ同時期にドイツ文学をご教授頂いており、現在、こうして桜門ドイツ文学会の末席に連なっている。それは単なる偶然と言われればそれまでだが、しかし、創刊号が世に出たのは、私が生まれた年であることも考え合わせると、何かしら私と見えない糸でつながっているようにも見えるのである。山形時代の一の門弟、佐藤通次氏とともに奥津先生が編纂された『岩波独和辞典』で Schicksal を引いてみると、「運<sup>めく</sup>り合わせ」という訳

語が最初に置かれているが、この目に見えない糸は、まわり合わせであると私は信じている。

学会誌『ドイツ文学』の記念号、100号の編集後記に「最近のドイツ語・ドイツ文学研究の置かれている状況を考えてみますと、従来のように純粹なドイツ語学やドイツ文学の研究だけではなく、もっと広い関わりの中での研究、学際的、総合的な研究が求められているように思われます」と述べられている。

しかし、そのようなことは、それより40年も前に奥津先生が「創刊の辞」において、本機関誌の対象の範囲を「広くにも、近くにも眼をさし向けて」とすでに書き記し、月と星を眺め、森に遊ぶ子鹿を見る、あのリュンコイスの眼を持ってと求めておられた。この雑誌に、『ファウスト』の塔守の名にちなんで「リュンコイス」と命名された理由もそこにある。今から見ると、『リュンコイス』は時代の先も予見していたと言えるであろう。

さて、山形県立図書館には私たちの雑誌 LYNKEUS が25冊入っているのだが、これは公立図書館の中では最大所蔵数ではないだろうか。内訳は、不思議にも4号、5号、7号、8号、9号、10号の6冊と、1号から19号までの19冊の2つのグループに分かれ、書庫には、前者が県人関係の、後者が一般の雑誌の場所に離れて別々に保管されている。この状況について係の人にその理由を伺うと、6冊の方は相良守峯氏からの寄贈書で、19冊の方は出所が分からないとのことであった。推測するに、一時期発行元の独文研究室が毎年きちんと献本して下さったのであろう。昔、埼玉県立浦和図書館でも2冊見かけた記憶があるが、大学ではなく、なぜ公立の、しかも山形の図書館に19号まで『リュンコイス』が所蔵されているのかが判然としない。この辺りの事情をご存知の方がおられれば、教えて頂きたい。

数年前に、編集委員長の豊田順一先生が「研究室の書庫でバックナンバーを保管するのが難しいなら、どの図書館でもよいからどこか揃えて置いてくれるところを探してみよう」と言われていたことを思い出し、カウンターの方に「この後の20号から48号までお送りしてよろしいでしょうか」と尋ねたところ、「上の者に聞いてみます」と言って相談しに行ってくれた。程なくして戻って来て、その方が言われるには「送って頂いてもスペース



に余裕がなくなってきましたし、山形関係の雑誌ならいいのですが」  
とのことであった。

それならば、この『リェンコイス』50号はどうだろうか。きっと山形  
県立図書館は、この桜門ドイツ文学会の記念号だけは拒まずに受け入れ、  
19号の右隣りへ立てて下さるはずである。